

1 山とイエ——熊本県矢部町の場合——

山口大学 木下謙治

一

熊本県上益城郡矢部町は、陳野峰をへだてて、熊本市から四〇・六〇キロ離れたところに立地する農山村である。標高六〇〇メートル前後のところに集落が点在し、町の北部は阿蘇の外輪山の一角にまでおよんでいる。矢部町は、旧浜町を中心に、下矢部村、白糸村、御岳村、中島村、名連川村など旧六ヶ町村が昭和三〇年代はじめに合併してできた町である。面積二九六平方キロ、人口一万八千余、農家戸数二、二三三戸をかぞえる。山林原野が多く、耕地は約二、八〇〇ヘクタールである。平均一戸当たり耕地面積は一・三ヘクタール前後である。

この矢部町で、現在注目されている問題の一つとして、後継者の問題がある。県立矢部高校農林科（定員五〇名）卒業生の八割以上が、毎年、後継者として地元にのこっている。矢部はいまや県下でもつとも農業青年の多い地域である。

二

矢部の農業の特徴は伝統的な複合経営にある。米、畜産、蔬菜、しいたけなどが主要なものとして組みあわされており、その他にも、養蚕、栗などにみるべきものがある。しかし、平均的な農業所得は七二万円と県の七五万円（昭和四八年）の水準からややおちている。

もつとも、ひと口に矢部といつても、白糸など南部では經營規模

も小さく、山林所有も少ない。いっぽう北部では、相対的に經營規模が大きく、山林所有も大きいという相違がある。

矢部の自立經營志向型の農家のケース・スタディによれば、ここでの複合經營は、農山村という立地上の諸条件に制約されながら、山林原野の利用と深いかかわりをもつてているように思われる。仔とりを中心とした赤牛の飼育が、放牧場や原野での採草による飼料自給の高さと結びついていることはいうまでもない。また、山林は、いだけの原木の供給源となる。しかし、それ以上に重要な点は、決して個々の農家の山林所有が広大なわけではないが、複合的な農業經營を補うものとして山がもつてている意味あいである。

三

ケース・スタディでみると、矢部の農家は、「家」的な内容の一部を保持しながら、「家族」としてしつかりしている。複合經營が維持されている中で、後継者が多くのこつているという事実はおそらく、ケース・スタディの結果をやや一般化してもよいことを示していよう。

伝統的な複合經營は、農業近代化の波のなかで、ごく最近までのところを保たれてきた。確かに、近代的な經營の論理にはそぐわないものもあるし、矢部でみても、そこに所得性の高い農業が展開されているわけでもない。しかし、そうしたなかで、多くの青年が農業にとどまってきた。

この問題をとく難の一つとして、山とイエの問題が考へられる。

仮設的な説明項を列挙すれば次のようになる。

①山の育林→(世代をつなぐ時間系列へはいるので)→②農家の維持・存続→④ムラ共同態の再生産

これらの説明項を④に焦点をあわせていえば、矢部では、たしかに、ムラ共同態がかなり強く生きている。旧村単位の農協は、まだ合併していない。矢部には、俗に四八谷あるといわれるが、川すじの谷ごとのまとまりの強さという封鎖性もある。

かつて陸の孤島ともいわれたとされる封鎖性から、矢部の農業をめぐる現状を、博物館ゆきの古きの残存とみる見方もありうるであろう。しかし、ここでは、それをやや別の角度から検討してみたいと思う。

その場合、共通課題の「生活破壊」という点に関していえば、それに抵抗する要因を注目することとなろう。